

【茨城大学】ドイツの原発倫理委員を務めたシュラーズ氏ら招きシンポジウム

茨城大学で、5月23日（土）、ベルリン自由大学（ドイツ）教授のミランダ・シュラーズ氏、東京大学名誉教授の山脇直司氏らを招き、「エネルギーから考えるポスト震災社会とサステナビリティ学」と題したシンポジウムが開催された。気候変動や自然災害への適応策の検討や持続可能性に関する研究・教育を行っている茨城大学地球変動適応科学機関（ICAS）のほか、一般社団法人サステナビリティ・サイエンス・コンソーシアム（SSC）、国立研究開発法人国立環境研究所などが主催。

環境政策の専門家であるミランダ・シュラーズ氏は、2011年3月からドイツ政府の原発問題倫理委員会の委員を務めた。日本の高校や大学で学んだ経験もある。冒頭の基調講演では、現在のドイツのエネルギー転換政策に至る歴史や倫理委員会の報告の内容、その後の具体的な取り組みや課題などについて話をした。

その後は、学生、教員、一般市民ら約150名の来場者がグループに分かれ、ワールドカフェ形式で意見を交わし、日本のエネルギー政策について議論を深めた。

議論を終えて、シュラーズ氏は「ドイツのエネルギー転換を方向づけているのはピープル・パワー。温暖化も原発も、地球の持続という点で深刻な問題。今日のような議論を続けていくことが大事」と語った。



ドイツのエネルギー転換政策について講演するシュラーズ氏



グループに分かれて日本のエネルギー政策について議論を深めた